第三講　傍線部理由説明問題②　30分

次の文を読んで、後の問に答えよ。

今日ごくあたり前に使われている「言文一致体」は、明治二〇年頃から明治四〇年近くまで、およそ二〇年かけてようやく一般化していった。たとえば『吾輩は猫である』（明治三八～三九年）なども、この文体が一気に広まっていく渦中に世に問われた小説だったのである。猫に「～である」という演説調で語らせるなど、それまで思いもよらなかった実験が可能になったわけで、小説の表現領域や発想はこれを機に急速に広がっていくことになる。漱石が齢（よわい）四十近くなって初めて小説の筆を執ったのも、また森鷗外が長い中断を経て現代小説の執筆を開始するのも、この新しい文体に触発された側面が大きい。文体をめぐるそれまでの伝統を見切ったことを代償に、近代小説は一気にその全盛時代を迎えることになったわけである。

言文一致の利点は、なんと言ってもその平明な「わかりやすさ」にあったのだが、これと並び、当時しばしばその長所とされたのが、記述の「正

確さ」であった。物事を正確に写し取っていく写実主義の浸透にともない、「言文一致体」は日常のできごとを〝ありのまま〟に描写していくのにもっともふさわしい手立てであると考えられたのである。

だが、考えてみると、(1)これはそもそもおかしなことなのではないだろうか。

口語（会話）は、本来きわめて主観的なものであるはずだ。表情やみぶりで内容を補うこともできるし、あらかじめ共有されている話題であれば、自由に内容を省略することもできる。当時の描写論議、あるいは言文一致論議を見ていて奇妙に思われるのは、主観的な口語を模したこの文体がもっとも「客観的」で「細密」である、とまじめに信じられていた形跡のあることだ。急速に広まっていく写実主義の風潮の中で、過度に客観性が期待されてしまった点にこそ、おそらくはこの文体のもっとも大きな不幸と矛盾、同時にまた、それゆえの面白さがあったのではないだろうか。

田山花袋の「平面描写」論（『生』に於ける試み』明治四一年）は、「客観の事象に対しても少しもその内部に立ち入らず、又人物の内部精神にも立ち入らず、ただ見たまま聴いたまま触れたままの現象をさながらに描く」ことをめざしたもので、言文一致体にいかに客観的なよそおいを凝らして

いくか、という課題から生み出された、当時を代表する描写論である。言い換えるなら、「客観」への信仰があったからこそこうしたよそおいもまた可能になったわけで、ここから話者である「私」を隠していくためのさまざまな技術が発達していくことにもなったのだった。結果的に叙述に空白——目隠し——が生み出され、読者の想像の自由が膨らんでいくことになったのは(2)大変興味深いパラドックスであったと言わなければならない。

一方で、こうした「話者の顔の見えない話し言葉」の持つ〝欺瞞〟に対する疑問も、同時にわき起こってくることになる。特に次にあげる岩野泡鳴の「一元描写論」は、花袋の「平面描写論」とは正反対の立場に立つ考え方なのだった。

作者が自分の独存として自分の実人生に臨む如く、創作に於いては作者の主観を移入した人物を若しくは主観に直接共通の人物一人に定めなければならぬ。これをしないではどんな作者もその描写を概念と説明とから免れしめることができぬのだ。その一人（甲なら甲）の気ぶんになつてその甲が見た通りの人生を描写しなければならぬ。斯うなれば、作者は初めてその取り扱ふ人物の感覚的姿態で停止せずに、

その心理にまでも而も具体的に立ち入れるのである。そして若し作者が乙なり丙なりになりたかつたら、さう定めてもいいが、定めた以上は、その筆の間にたとへ時々でも自分の概念的都合上乙若しくは丙以外のものになつて見てはならぬ。

（『現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論』大正七年）

「話者の顔の見えない話し言葉」に対して、はっきりと一人の人物の視点に立ち、その判断で統一を図れ、という主張である。(3)この主張をさらにおしつめれば、明確に「顔」の見える「私」を表に出すのが一番明快である、という考えに行き着くことになるだろう。それを極端な形で実践したのが明治の末から大正初頭にかけ、反自然主義として鮮烈なデビューをかざった白樺派の若者たちなのだった。彼らは一人称の「自分」を大胆に打ち出し、作中世界のすべてをその「自分」の判断として統括しようと企てることになる。

（安藤宏『「私」をつくる　近代小説の試み』より）

問一　傍線部（1）について、筆者がこのように考えるのはなぜか、説明せよ。

問二　傍線部（2）について、このように言えるのはなぜか、説明せよ。

問三　傍線部（3）について、このように言えるのはなぜか、説明せよ。

（次ページより解答欄）

問一

問二

問三

第三講　傍線部理由説明問題②　解答

問一

本来きわめて主観的な口語を模した「言文一致体」が、物事を正確に写し取っていく写実主義の浸透にともない、もっとも客観的で正確に物事を描写するのにふさわしい文体であるとまじめに信じられたから。

問二

「言文一致体」がもっとも客観的であるという信仰があったため、客観的なよそおいを追求することで、文章の話者を隠す技術が発達し、それがかえって内面に対する読者の想像をかきたてることになったから。

問三

「言文一致体」は客観的なよそおいを追求して話者が隠され、内面描写は説明が必要なものになってしまう。そこで作者の主観を移入した人物か主観に直接共通の人物を一人登場させ、その一人の人物の視点に立ちその判断で統一を図り、内面のわかりやすさと正確さが達成できるから。